第1章

びっくりするような大きな利益を求めて

In Search of Amazing Profits

僕がトレードを始めたきっかけは、あるテレビコマーシャルでFX取引をして簡単にお金を稼ぐ方法が紹介されていたからだ。世界の金融拠点であるニューヨーク市にあるらしいアメイジング・フォレックス・プロフィッツという会社が、プロトレーダーたちのすごい秘密を一般人の僕に驚くべき破格の値段で教えてくれるというのだ。僕はすぐさまその会社のソフトウエア購入を決断した。すぐにお金を用意さえすれば、あとは簡単に使えるシステムを買って毎日大金を儲けるだけ――その宣伝はそう約束しているようだった。僕はフリーダイヤル番号に電話をかけて、その場で、真夜中だというのに、2000ドルをはたいてそのソフトウエアを購入した。あとはソフトウエアが小包で郵送されてくるのを待つだけだった。FX（外国為替）市場で得た利益でお金持ちになる。僕はその一歩を踏み出したんだ。

このことは妻には一言も伝えなかった。僕には考えがあったからだ。まずはソフトウエアを手に入れて、僕のアシスタントのスコットに頼んで仕事場のコンピューターにソフトをインストールしてもらう。そして大金を稼ぎ始める。そこまでしたら、妻に何か素敵なプレゼントでも買ってやって、伝えるんだ――僕はこれからフルタイムのFXトレーダーになって、億万長者、ひいては家族のヒーローになるんだと。おお、なんて完全無欠な計画なんだ！

僕は今か今かという思いでソフトウエアの到着を待った。35歳にもなって、その日に何の郵便物が届いたかを家に飛んで帰って確かめる自分がいた（どうして49.95ドルの追加料金を払って速達便にしてもらわなかったんだ？　親切なインド人の販売オペレーターが、すぐに始めたほうがいいとあれほどしつこく勧めてくれたのに、どうして僕は耳を貸さなかったんだ？）。小包が届くまで、まるで永遠とも思える時間が流れたが、その品物はようやく到着した。すぐに始めたくてたまらない僕は（テレビコマーシャルでFX市場が１日24時間開いていることを学んでいたこともあって）、スコットに電話をしてその晩に会社のあるダウンタウンまで来てくれと頼んだ。妻には会社で大事な話し合いをしなければいけないからと伝え、彼女と子供たちに行ってくるよとキスをして、そして地下鉄に飛び乗って59番街へと向かった。

すべてがうまくいっているように思えた。僕たちはたくさん借金をしていたけれど、この新しいトレードという道さえあれば相当の利益を上げることができそうだ。コマーシャルに出演していた人のなかには、１日に何千ドルも稼いでいる人もいた――それにこれは「すぐにお金持ちになれますよ」的な詐欺まがいの商法でも何でもない。僕は株式市場でデイトレードをしている人たちに会ったことがある。彼らはきちんと下調べをしてトレードをまるでちゃんとした仕事のように考えていて、かなりのお金を稼いでいた。なかには1990年代後半に大儲けをして、市場が下落したにもかかわらず、いまだに市場で生き延びている人もいた。１日わずかの時間しか働かずにお金を稼げる集団に自分が仲間入りをするんだ、と思いをめぐらすのは気分のいいものだった。

オフィスに着いたときにはすでに夜９時を回っていて、みんなとっくに帰宅したあとだった。パーティションで仕切られた僕のデスクでスコット・ニードルウエーが待っていた。彼は文書係助手で、僕と同じ高校の出身だった（といっても彼は僕の７年後の卒業生だが）。長髪でハイテクに明るい男で、高校卒業記念アルバムのなかで「最も警察の世話になりそうな人」賞に輝いていた。

「それで、今晩は何をするんだい？」と彼が聞いてきた。彼が酒を飲んできたか、たばこより強い何かを吸ってきたことは一目瞭然だった。でも彼が法律事務所をクビになるのはどうせ時間の問題だったので、そこは大目に見てやった。それに、その晩の僕は彼の助けを必要としていたからなおさらだった。

「ソフトウエアを持ってきたんだ。どうすれば使えるようになるかやってみせてほしいんだ」

過去５年間、基本的にスコットが僕のコンピューターを動かしてきた。幸い僕の仕事はコンピューターを使うようなことはほとんどなかったし、弁護士が僕に連絡を取るときはスコットにメールを送ってくれれば事足りた。スコットはそれを見て僕に状況を知らせてくれるのだ。だが今晩の僕は、自分がパソコンをいじることにワクワクしていた。

スコットはCDを何枚か取り出して、難なくソフトウエアをインストールした。コマーシャルの宣伝文句にあったとおり、ソフトウエアはかなり分かりやすくできていて、まるでニュースの速報のようだった――画面に見出しが現れて、特定の通貨ペアを買うか売るかを教えてくれる。画面の別の場所では、現在の保有ポジションがすべて表示されていた。ほとんどが緑色になっていて、プラスであることを示していた。

一連の作業はたったの10分で終わったのに、スコットは見るからに帰りたそうにしていた。家へ帰るのか、ほかにどこか行くところがあるのかは分からないけれど、また明日な、と僕が彼に告げると、彼は何も言わずにそそくさとオフィスから出て行ってしまった。これが何のソフトウエアなのかを聞きもせずに！　彼は自分の財政事情を改善する機会を自ら逃したんだ。まあ、残りの人生ずっとウエークマン・

バターマン・アンド・ベイリーで働けばいいのさ。僕はそんなのごめんだ。

僕は家に帰らずにすぐさまソフトウエアに飛びついた。じっくりと画面のあちこちをクリックしてみた。ヘルプマニュアルを二度読み、ソフトウエアのすべての画面をクリックしていろいろな取引の方法を学び、通貨ペアの提示方法に関する項目を読んだ。そこで通貨はペアで取引されることを知った。つまり、通貨を取引するときは常に、ある通貨を買って別の通貨を売っているか、またはある通貨を売って別の通貨を買っているということだ。通貨を単独で金融商品として取引することはできない――それはうなずけた。僕が読んだのはこれだ。

「ドル高だと思うときは自分自身にこう問いただしてみましょう――何に対して高いのか？　当然、もうひとつの通貨に対してです。そこで、そのドル高に対する通貨を選び、その通貨を買います。このときドルを支払って買うので、それはつまりドルを売りもうひとつの通貨を買っていることになります」

理解するのに少し時間がかかったが、数時間もしないうちに僕は文書係からFXの達人へと成り替わった。主な通貨はユーロ（EUR）、ポンド（GBP）、円（JPY）、それからもちろん米ドル（USD）だということを知った。為替レートの読み方も分かった。こんなふうに提示される。

GBP/USD 1.8000/1.8005

この意味は、ポンドがドルに対して1.8000で売れる、もしくは1.8005で買えるということだ。簡単じゃないか。加えて学んだことは、もしポンドが1.8000から1.8001に１ポイント動いたら、これを

「１ピップ（pip）動いた」と言う――ピップとは、外国為替用語で、Percentage In Point（ポイントで示す割合）のことだ。そして僕が何をすればいいかは、ソフトウエアが全部教えてくれるというわけだ。

翌朝、アメイジング・フォレックス社お薦めの業者で取引口座を開くために、必要書類をすべて送った。24時間もたたないうちに、クレジットカードによる口座入金の承認が下りた。そして口座開設終了までまた待つことになるのだが、これがソフトウエア到着を待ったときよりもずっと耐え難い。儲け損ねている利益のことを考えてしまうじゃないか！　一晩中、僕はソフトウエアがいくつもの通貨ペアに対して買えだの売れだの指示しているのを見ていた。トレードは次から次へと利益を出していた。コンピューターの横に置いた紙に、ソフトウエアの言うとおりにしているだけで何ポイント増えていたかを書いて計算してみた――110ポイント以上だ。そんな利益を見過ごしていることを知りながら、今日１日仕事に集中するのは難しそうだった。問題なのはお金を稼げるかどうかではなく、できるだけ多くトレードをする方法を見つけられるかどうかだった。

その夜は眠れなかったが、起きていたかいはあった。これまで以上にトレード開始にやる気満々になった僕は、その日の昼休みに１日のうちでトレードができる時間の予定を立ててみようとやる気と決意がわいていた。たとえ睡眠時間を削ることになろうとも、雇用主から仕事時間を盗むことになろうとも、その見返りは大きかった。そのためならどんな犠牲でも払う覚悟だ！

財政問題の対処法

大抵の人間は自分の問題を解決しようとしない。僕は10歳のときに「トミー・ベースボール・ホームラン・チャレンジ」という小型電子ゲーム機を壊してしまった。振っても、電池を逆向きに入れ直しても、

神に祈っても、壊れたゲームを元どおりにできないと気づいた僕は、それを自分の部屋のクローゼット奥深く、冬物の毛布の陰のティーボール（バッティングティーの上に置かれたボールを打つ野球に似た競技）のユニフォームの下に隠した。そこに置いた理由は２つある。ひとつは、ホームランを打った喜びのあまり、まるでフットボールを扱うようにその高価なおもちゃを床にたたきつけて壊してしまったなんてことが、両親にばれないように。もうひとつの理由？　それは、お守りと魔法の力を持ったティーボールのユニフォームの下なら、野球の神様がおもちゃを直して生き返らせてくれるかもしれないと思ったから。

それが問題の解決法としては役に立たないことに、僕はすぐに気がついた。しばらくしてその同じ年に僕の両親が離婚をしたとき、父親をティーボールのユニフォームの下に隠したところで両親が怒鳴り合いのけんかをやめるわけじゃないってことを僕は悟った（それに壊れたゲーム機がまだユニフォームの下にあって、父親を隠す場所すらなかったし）。でも、問題を隠すこと、つまり最大の試練をクローゼットにしまい込むことは、僕が人生で困難に直面したときに一番よく使う対処法となった。

だけど、アメイジング・フォレックス・プロフィッツ社のソフトウエアを買ったとき、僕は自分の財政状態を自らコントロールし始めたんだ。僕は問題を解決しようと行動していた。それは本当に気分の良いことだった。妻が怪しむことは分かっていたから、最初は彼女にこの決断を知られないようにすることが重要だった。この小さな偽りはお金持ちになるために必要で、最終的には取るに足らないことになる。僕がいくら稼げるかを彼女が理解すれば、それはウソではなく驚きに変わるだろう。

「驚き」という言葉は、僕たちがこの後どのように感じたかを表すのに、まさにぴったりの表現だった。

自分の才能を確信する

１週間が過ぎた――取引口座を開くのは、僕が思っていたよりもずっと難しかった。何と言ってもFX仲介業者にパスポートや公共料金請求書、その他もろもろのコピーをファクスしなければいけなかったから。送らなくてよかったのは前立腺検査の結果ぐらいだった。その間僕は、アメイジング・フォレックス・プロフィッツ社のソフトウエアがその名のとおり驚くほどの利益を上げるのをじっと見ていた。勤務時間中だけでも、毎日何百ポイントもの利益を上げていた（勤務時間以外にも昼間は目を離さなかったし、夜も毎晩遅くまで起きて見ていた）。それがドル計算でいくらになるかに気づいた僕は、もう我慢の限界にきていた。

口座開設が終了したらFX仲介業者（フロリダに拠点を置くユニバーサル・カレンシー・ブローカー）がメールで知らせてくれることになっていたので、このもったいないトレード開始までの時間を利用してもっとメールを使いこなせるようになろうと決めた。そうすれば、口座が入金可能になったことがすぐに分かる。それにスコットが、僕がどこにいてもメールを受信できるように、まる１日かけてブラックベリーの使い方まで教えてくれた。メールやコンピューター、アメイジング・フォレックスのソフトウエア、ブラックベリーなどを使えば使うほど、僕はこのハイテク技術というやつがどれほどすごいかに気がついた。もしかすると、ブラックベリーでソフトウエアを実行してどこでもトレード、なんてこともできるのかもしれない。可能性は無限大だった。トレードを通して経済的自立を図るという考えが非現実的だとはまったく思わなかった。

2004年３月16日、東部標準時の午後12時６分ちょうど、そのメールは届いた。僕は会議に参加していて、保険訴訟をしている弁護士チームが15分単位ではなく６分単位でウエークマンのクライアントに課金

する利点を議論しているところだった。僕は喜んで会議に出席していた。だって会議ならブラックベリーを見ることも簡単だし、オフィスで大変な仕事をしなくてもいい。ただ単に、「文書管理」を「調査」として分類してしまえば事務手続きに要する時間として弁護士料を少し追加請求できる、といった内容の短いプレゼンテーションをするだけだ。そのプレゼンテーションが終わりに近づいてきたころ、僕のブラックベリーが鳴ってその瞬間が訪れたことを知らせてくれた。

「失礼、ちょっと重要な連絡が入ったもので」と席を立ちながら言った。「僕の娘が救急外来に行ったようなので、ちょっと様子を確認しないと」

弁護士たち、特に小さな子供を持つ弁護士たちは皆、僕が緊急事態で席をはずすことをすぐに許してくれた。もちろん僕は大ぼらを吹いていたわけだが、やはりこれも「小さな悪行」にすぎず、お金持ちになるというもっと重要な目標の達成には必要なものだった。

会議室の外で僕は最高の知らせを読んだ――取引口座の開設手続きが終了したので、クレジットカードでいつでも入金できるということだった。僕は自分のデスクへ急いで行き、クレジットカードを取り出してFX業者に電話をした。

ほんのつかの間のことだったが、口座に1000ドルを入金することに夢中になっていた僕は、自分が見られていることに気がつかなかった。ジョン・マーフィーという名前の契約書関連を主に扱う若い弁護士が、僕のパーティションの入り口近くで立っていたのだ。

「クレジットカード番号を読み上げているのが聞こえたけど」と彼は言った。「詮索するつもりはないけど、大丈夫かい？」

「ああ、大丈夫だよ。ありがとう」と僕はうなずいた。しまった！　娘が病院に行ったなんてウソだったことがばれてしまった。謝らないといけないだろう。

「そうかい。困ったことがあったら何でも言ってくれよ。緊急外来

の費用を自己負担で支払わなきゃいけなかったのかい？」

やったぞ！　僕がウソをついたことに気づいていない！

「そうなんだ」

僕はそう言ってまた小さなウソをついた。「お金持ちになるために犯した小さな悪行」という名のリストが、こうしてどんどん増えていく。

「困ったことがあったら何でも言ってくれよ。保険が適用されるはずだからな。この会社の福利厚生に問題があることは僕も知っている。だから僕にできることなら手を打ってみるよ」

僕は彼に礼を言って、その次にウソがばれなかったことを神に感謝した。そうしたらジョン・マーフィーのことも、救急外来のことも、自分がついたウソのことも、すっかり忘れてしまった。さあ、取引をするときが来た。アメイジング・フォレックスのソフトウエアと取引口座を立ち上げ、「昼休み外出中」と書かれた札をパーティションの外側に貼り、パソコンのモニターが自分だけに見えるようになっているかどうか位置を確認した。

アメイジング・フォレックスにログインした直後（ログインID SUPERTRADER_2000、パスワード　G$TRICH）、僕はスコットが自分の後ろに立っていることに気がついた。

「口座は開けた？」

彼の声を聞くのもうっとうしく感じた。今はプライバシーが必要なのに！　時間はどんどん過ぎていき、昼休みはあと37分しか残っていない。この間にできるだけ多く取引をしなければ。

「ああ、スコット。口座は開けたよ。どうなってるかちょっとのぞいてみようと思ってな。昼休みの間にさ」

彼はうなずいた。「オフィスで小遣い稼ぎか！　いいなあ」

「そんなんじゃない」。僕はいらついた口調で返事をした。「今日は焦らずにただ見るだけだ」と、また思ってもいないことを言った。ウソをつくことはどんどん簡単になってきていた。それに今は、少し真

実をゆがめれば迷惑な邪魔者を追い出せるのでありがたかった。
「そうかい、ならおれもここで見せてもらおうかな」
僕はため息をつき、そしてスコットと議論したところで貴重な取引時間がなくなるだけだということに気がついた。
「いてもいいけど静かにしていてくれよ。こいつを覚えようとしてるんだから。僕には難しいんだ」
「ジー、ビー、ピー（GBP）に買いシグナルが出てるみたいだぜ」とスコットは言った。
彼の言うとおりだった。あったぞ、初めての注文シグナル！　すぐに取引用システムに切り替えて、GBP/USDの表示レートをクリックすると、注文画面がポップアップで表示された。
一瞬のためらいもなく――だってこの後もどんどん取引チャンスが現れるかもしれないから――「OK」ボタンをクリックしたら、なんと、シューッという滑らかな音とともに僕の取引は始まった。その取引は「ポジション一覧」画面に確かに表示されていたが、すでに50ドルもマイナスになっていた！　何でだ？
「何でだ？」。気がついたら声に出して言っていた。
「早くも最悪だな」とスコットは言った。ペンで奴の両目をくりぬいてやろうかと思ったが、そんなことをしていたらまた貴重な時間が失われる。僕には時間を無駄にしている暇なんかないんだ。
アメイジング・フォレックスのソフトウエア画面に戻ってみた。すると、今僕が注文したものと同じGBP/USDの取引は、その時点で５ポイント（僕は１ポイント＝10ドルで取引していたので50ドル）のマイナスということだった。ふう！　アメイジング側も同じように早くも損失を出していると知って安心できた。そういえばこのシステムの取引のほとんどがマイナスで始まっていたな。よし。僕はデスクの下でしっかりと床に両足をつけ、次の注文が現れるのを待った。
そのとき、携帯電話が鳴った。それが妻のジーニからであることを

着信音が知らせていた。彼女からの電話を取り損ねないように、スコットが着信音を設定してくれたのだ。
「出ないのかい？」と、妻からだと分かっているスコットはそう聞いた。今度は彼の口をテープでふさいでしまおうかと思ったが、セロテープしかそこになかったのでそれでは無理だとあきらめた。
携帯電話を開く僕の両手は汗ばんでいたが、冷静さと落ち着きを見せるために電話に出た。そして僕はイライラしながら話し始めた。
「何だい？」
「あら、あなた」と彼女はうれしそうに甲高い声で言った。「お仕事の調子はどう？」
順調だよと答えたものの、その声の調子は、妻が都合の悪いときに電話をかけてきたことを暗黙のうちに察してほしいと願う夫の言い方だった。
「今は都合が悪かったかしら？」と彼女は聞いた。「夕食は何がいいかと思って」
「何でもいいよ」
「な、ん、で、も」とまるでそれをメモしているかのように、ゆっくりと彼女は答えた。「分かったわ。スーパーで『なんでも』を探してみるから。坊やと話す？」
「あとでな」と僕はすぐに答えた。携帯電話を耳元で持ちながら画面を取引口座に切り替えるのは至難の業だった。試してはみたが、メール画面に切り替えるのがやっとだった。でもこれじゃあ取引の様子すら見えないじゃないか！
「そうね。ちょっと声を聞きたかっただけだから。愛してるわ」と彼女は言った。本当はもっと話したがっていることは分かっていたけれど、僕が強く言えば、彼女は気を利かせて電話を切ろうとしてくれていた。だから僕は強く言った。
「あとにしてくれ」と、大きな声で言った。「じゃあ切るぞ」

すぐに胸が痛んだが、それでも電話を切った。彼女に応えるスキも与えなかった――僕は汗だくになっていて、床についた右足を揺らすのをなかなか止められなかった。足を揺らすのは緊張したときにする僕の癖だった。

スコットは、僕が妻の電話をそんなふうに切ってしまったことに何も言わなかった。僕は取引用ソフトウエアをクリックして、口座を表示させた。保有ポジションの現在の利益を見た――300ドル。300ドル！スコットの口が驚きであんぐりと開いた。僕の汗は冷や汗に変わる。自分の心臓音が聞こえ、床をトントンと踏んでいた右足は止まった。10秒くらい過ぎたと思うが、僕とスコットは時間のことなど忘れ、僕はうっとりと放心状態になってしまった。

僕はその日に仕事を辞めることを想像していた。妻が新車のスポーツセダンに乗っている姿が脳裏に浮かんだ。そしてハンプトンの別荘へ向かう途中の高速道路で、速度を上げてパスを使って料金所を走り抜ける彼女に、子供たちがうれしそうに声援を送る姿。さらに、レゲエ音楽がBGMで流れ、脚の長い金髪の女の子たちが楕円形のプールの周りで日光浴をしているなか、ミッドナイトブルーの水の中に飛び込む自分の姿。これこそが人生だ！　トレードが僕にもたらしてくれた人生！

スコットに肩をつかまれて揺さぶられたせいで、僕はその白昼夢から現実に引き戻された。「なあ、なあ、そのお金取らないと！」。彼の言うとおりだった。アメイジング・フォレックスがどんな指示を出したのかはまったく分からなかったが、300ドルのチャンスを逃すつもりは毛頭なかった。「ポジション一覧」の画面を一度クリックすると、メッセージ画面が現れてポジションを決済するかどうか聞いてきた。

「当然だろ！」と、僕は大声でそうつぶやいた。

「やったぜ！」。スコットは叫んで僕の快挙を喜んでくれて、１週間前よりもずっとアメイジング・フォレックスのソフトウエアに興味を持っていた。

決済ボタンをクリックしたら、突然、僕の口座評価額は1000ドルから1300ドルへと変わった。何てこったい、というのが僕の感想だった。これは本当に簡単だ。これがあれば、本当に僕の財政問題は解決する。１分足らずで、僕は妻に新しいiPodを買ってやれるだけのお金を儲けた。そうだ、トレードのことを妻に全部話すときには、iPodを彼女にプレゼントしてあげよう。そう心に決めた。

ソフトウエアが今度は何を指示しているかを見てほしいとスコットが催促するので、ソフトウエアの画面に戻ってみた。ところが何かがおかしい。さっきの取引はまだ残っていたが、利益ではなく34ピップスの損失を示していた。

「一体どうなってるんだ」とスコットが聞く。「反対に動いたのか？」

僕は何か手がかりを得ようと、しばらく画面を見渡した。そしてすぐに分かった。

「おい、スコット。売りシグナルが出ていたときに僕は買ってたんだよ」

スコットは言葉を失った。

僕は間違って取引をしたんだ！　すぐに取引口座をもう一度確認した。よし、うれしい利益は今でも「口座資産額」の画面にちゃんと残っている。つまり、GBP/USDを売れと言っていたアメイジング・フォレックス・プロフィッツの提案は最悪のアイデアだったということだ――だが僕たちは間違って逆の取引を行って、利益を上げた。売りのポジションがさらに損失を膨らませているのを横目に、僕は正直うれしく思った。

僕は笑みを浮かべた。僕たちは、アメイジング・フォレックスのソフトウエアを欺いたんだ！　僕たちは勝者だ。完全に舞い上がっていた僕は、自分がソフトウエアよりすごいんだと思った。僕はそれほどの腕利きなんだと。

スコットもそんな僕に同意して、ソフトウエアが売りを勧めていたのに彼が最初に買いだと読み間違ったことを、いみじくも自分の手柄にした。僕は彼の背中をたたき、そのうち利益の一部を彼と共有することを約束した。彼ならハイテク方面の助手として使えるかもしれない。当然、アメイジング・フォレックス・プロフィッツのソフトウエアと同じようなプログラムはほかにもあるだろうから、それをいくつかインストールしたっていい。

僕は、これ以上取引するよりも、妻に電話をすることにした。それは正しい行動だった。妻は喜んで僕を許してくれた。家に帰ったらちょっとしたお楽しみがあるよと彼女に伝えた。彼女は電話先でクスクスと笑い、それを聞いて僕は、自分がトレーダーとしてどんなにすごくても、さすがに自分の「人を操る能力」のすごさにはかなわないもんだと考えていた。

第2章

明るい未来

The Future Looks Bright

その日の仕事帰り、僕は妻にあげるiPodを買って地下鉄に飛び乗り、家に着くまでずっと上機嫌だった。もちろん、仕事を辞めるにはもっとたくさん稼がなければいけないが、その日はまるで辞表を提出したあとのような気分だった。

家に着いたときにはトレードのことで頭がいっぱいになっていて、妻にお楽しみのプレゼントを渡すことすら忘れてしまっていた。だからといって妻の顔を見るうれしさまで忘れてしまったわけではない。台所にいた妻を見つけ、彼女の腰に両腕をまわしてぎゅっと抱きしめた。

「そんなに強くしちゃだめよ」と、彼女は笑いながら言った。「キャロラインがお腹の中にいるんだから！」

妻は妊娠５カ月で、お腹の中ではキャロラインが予定どおり健やかに育っていた。お腹がだんだんと大きくなり始めていた妻は、相変わらず美しかった。僕が彼女の首筋にキスをすると、彼女は振り向いて僕の顔を見た。

「私だってあなたが帰ってきてうれしいわ。でも私たち、また家賃を滞納しているのよ。幸せなひとときに水を差すつもりじゃないんだけど」

彼女が僕を愛していることは分かっていた。そして僕に家賃を滞納